

八代集の「あはれなり」について

——形容動詞と和歌（1）

謝 静

はじめに

古典和歌では、形容動詞を使用することが少ない。そのことについては、平安時代の和歌を中心として、すでに複数の指摘がある。

山口仲美氏は、平安時代の散文作品と歌集（万葉集・古今集・後撰集）に含まれた和歌における形容動詞の使用（形容動詞の異なり語数における比率）について比較され、さらに新古今集の和歌も対象に加えて、

こうして、歌集、つまり韻文学は、奈良時代のみならず平安時代から鎌倉時代と、一貫して、散文学よりも、形容動詞の比率が低かったという傾向が指摘できる。

と述べておられる。また、その理由については、

歌の世界は、随所で指摘されているように、伝統を重んじる世界である。従って、最も考えやすいのは、形容動詞の未発達な奈良時代に成立した万葉集の傾向を、古今集以後の歌集

もそのまま継承したためだと考えることである。と推測されている。

漆谷広樹氏は、いわゆる「ゲ型形容動詞」について研究された論考の中で、「中古初期でも目立って「ゲ型形容動詞」の少ないのは『古今集』である。」と述べられ、古今集に見える「ゲ型形容動詞」の用例が、

をりとらばをしげにもあるか桜花いざやどかりてちるまでは
見む（古今集・春上・六五・よみ人しらず・「題しらず」）
の一首しかないことを指摘された。さらに古今集における形容動詞全体を含めた使用の少なさとその理由について、氏は次のように述べておられる。

『古今集』では接辞を伴い「形容動詞」化している語も「形容動詞」全体の数も少ない。これは和歌の性格を考えればいわば当然のことなのかもしれない。つまり和歌では好んで古い語を使う傾向があり、中古に入って発達をとげる比較的新しい語である「形容動詞」は和歌にとって好ましい語ではないのだろう。参考までに『古典対照語い表』によると『後撰

【集】においても「形容動詞」の語は少なく、異なり語数で40語、そのうち「くげ型形容動詞」は(中略)3語のみである。

両氏の研究では、平安時代の歌集として古今集・後撰集が取り上げられ、山口氏は、新古今集も参照されている。そこで指摘された、和歌において形容動詞があまり使われないことについては、調査対象を八代集に広げた場合にも、基本的に同様の傾向が確認できる。

その一方で、個別の語によつては、ある程度まとまった数の用例がある形容動詞も見出される。ひめまつのお会編『八代集総索引和歌自立語篇』(一九八六年、大学堂書店)によつて、「くげなり」という形で項目が挙げられている言葉を調べると、用例数が二十より多い形容動詞として、次の語が挙げられる。(疑問を意味する「いかなり」「なになり」を除く。)

そらなり	51	はるかなり	41
あはれなり	40	あだなり	39
つねなり	29	ときはなり	22
ことなり	21		

さらに十以上の用例が見つかる形容動詞は左記のようである。

かずなり	16	さやかなり	15
ただなり	12	はつかなり	12
まことなり	12	さかりなり	10

先行研究において述べられるように、全体として古典和歌に形容動詞が用いられない中で、これらの語の用例が、どうして相対的に多いのか。それを明らかにするには、それぞれの形容動詞について、個別にその使われ方について調査、確認してみることが必要だろう。

本稿では、その手始めとして、「あはれなり」という形容動詞を取り上げて検討してみることとする。

1 使用の概観

八代集^③のそれぞれの勅撰集において「あはれなり」はどのよう
に使用されているのか。

次に示すのは、歌集ごとの、「あはれなり」を用いた歌の数／その歌集の総歌数、その比(%)を示したものである。

古今集	0	1	1	1	0	(%)
後撰集	2	1	4	2	5	(%)
拾遺集	3	1	3	6	0	(%)
後拾遺集	7	1	2	2	9	(%)
金葉集	2	7	1	7	3	(%)
詞花集	3	4	2	0	7	(%)
千載集	12	1	2	9	0	(%)
新古今集	11	2	0	0	5	(%)

全体として使用数が少ないので、単純な比較はできないが、三

代集の歌には「あはれなり」はとても少なく、それに比べ、後拾遺集・詞花集・千載集・新古今集の和歌には比較的多く用いられていることがわかる。また、千載集・新古今集で歌数そのものが多いことも注目される。

次に、部立ごとの歌の数を整理してみると、左記のようになる。

春	0	夏	3	秋	3	冬	5
恋	8						
雑	14 (うち、拾遺集と詞花集に一首重複)						
雑春	1	別	1	旅	3	哀傷	1
物名	1						

右のうち、雑春の一首と物名の一首は、どちらも四季の歌に近い詠み方の和歌であるので、四季歌として数え、「別」「旅」「哀傷」を「その他」として雑歌と合わせて数えると、

四季の歌	13
恋の歌	8
雑その他の歌	19 (一首重複、以下十八首として扱う)

となる。これをさらにまとめて四季の歌と人事の歌に分けると、前者は十三首、後者は二十六首となって、四季の歌よりも人事の歌のほうに、「あはれなり」が多く用いられていることがわかる。

『日本国語大辞典 第二版』は、形容動詞「あはれなり」の語義について、次のように記している。

〔名〕(形動)として。

心の底からのしみじみとした感動や感情、また、そういう感情を起こさせる状況をいう。親愛、情趣、感激、哀憐、悲哀などの詠嘆的感情を広く表わすが、近世以降は主として哀憐、悲哀の意に用いられる。

(1)心に愛着を感じるさま。いとしく思うさま。また、親愛の気持。

(2)しみじみとした風情のあるさま。情趣の深いさま。嘆賞すべきさま。

(3)しみじみと感慨深いさま。感無量のさま。

(4)気の毒なさま。同情すべきさま。哀憐。また、思いやりのあるさま。思いやりの心。

(5)もの悲しいさま。さびしいさま。また、悲しい気持。悲哀。

(6)はかなく無常なさま。無常のことわり。

(7)(神仏などの)貴いさま。ありがたいさま。

(8)殊勝なさま。感心なさま。↓あっぱれ。

右のような語義の中には、(2)(5)のように四季の景物(特に秋・冬)に当てはまるものもあるが、大体において人事の歌に当てはまるもののほうが多いように予想される。

以上の概観を踏まえ、「あはれなり」が和歌においてどのような意味で用いられていたのかを知るために、先に示した数の多い順から、まず、雑歌その他(離別・羈旅・哀傷)に分類された歌を概観し、次に、同じ人事の歌である恋歌を取り上げ、最後に四

季の歌を取り上げることとした。

2 雑歌その他における「あはれなり」

雑歌その他の歌で使われた「あはれなり」の意味は、『日本国語大辞典 第二版』に示された語義のうち、(2) (3) (5) (6) (8)にあたる。その中でも(5)の「もの悲しいさま。さびしいさま。また、悲しい気持。悲哀。」と、(6)の「はかなく無常なさま。無常のことわり。」の用例が多いので、その用例から概観する。

◇もの悲しいさま。さびしいさま。また、悲しい気持。悲哀。

・ 思ひいでもなきふるさとの山なれどかくれゆくはたあはれなりけり

(拾遺集・別・三五〇・ゆげのよしとき・「帥伊周つくしへまかりけるに、かはじりはなれ侍りけるによみ侍りける」)

この歌では、都の山が「船が港から離れて行くに従って、遠ざかり隠れてゆく」(新大系)のを見て、山(都)との別れを悲しむ気持を「あはれなり」で表現している。

・ かくばかりあはれならじをしぐるとも磯の松がねまくらならずは

(千載集・羈旅・五二〇・読人不知・「海辺時雨といへるこころをよめる」)

・ あはれなる野じまがさきのいほりかな露おく袖に浪もかけり

(千載集・羈旅歌・五三一・皇太后宮大夫俊成・「家に百首歌よませ侍りける時、たびの歌とてよみ侍りける」)
この二首はともに旅の歌であり、「磯の松がね」を枕とする「あわれに心細い思い」(新大系)と、「野じまがさきのいほり」での旅泊の「しみじみとも悲しい」(同)様子を、それぞれ表現している。

・ かくてだになほあはれなるおく山に君こぬよをおもひしらなん

(千載集・雑中・一〇六一・道命法師・「山寺にこもりゐて侍りけるころ、雨ふりて心ほそかりけるに、人のまうできて歌などよみ侍りけるついでによめる」)

この歌では、山寺に住む作者が、その奥山の寂しさ、心細さを、「あはれなる」と表現している。

・ いにしへにふりゆく身こそあはれなれむかしながらのはしをみるにも

(後拾遺集・雑四・一〇七四・伊勢大輔・「上東門院住吉にまゐらせたまひてかへさに人人うたよみ侍けるに」)
・ すぎきける月日のほどもしられつつこのみを見るもあはれなるかな (金葉集・雑上・五六三・上東門院・「御返し」)

この二首は、ともに、作者自身(身)の老いを主題として、それに対する寂しさや悲しみを、「あはれなり」を用いて表現している。

・ わけわびていとひし庭のよもぎふもかれぬとおもふはあはれ

なりけり (千載集・雑中・一一四五・法眼兼寛・「題しらず」)

この歌について、新大系は、「踏み分けわずらつて厭つていた庭の雑草も、枯れたと思うのは哀れに感じるものだ。」と解釈している。どんなものでもそれが失われるのは悲しいということ。「あはれなり」で表現している。

◇はかなく無常なさま。無常のことわり。

・さだめなきよをうきくもぞあはれなるたのみし君がけぶりとおもへば

(金葉集・雑下・六二二・藤原資信・「やうめい門院かくれおはしましておほんわざのこともはてて又の日、くものたなびけるをみてよめる」)

この歌について、新大系は、「無常な世を憂く思つて眺めやると、空の浮雲がしみじみと哀れをさそうことだ。頼りに思つていた方の火葬の煙と思うと。」と解釈している。陽明門院の死を嘆く歌であるとともに、世の無常を「あはれなる」と感じている。

・人をとふかねのこゑこそあはれなれいつかわがみにならむとすらん

(詞花集・雑下・四〇六・よみ人しらず・「人の四十九日の誦経文にかきつけける」)

・あはれなり我が身のはてやあさみどりつひには野辺の霞とおもへば (新古今集・哀傷歌・七五八・小野小町・題しらず)
「人をとふ…」の歌では、「他人を弔う鐘の音」(新大系)を聞

く悲しみとともに、「いつそれが我身のことになろうとしているのだらうか、もう今すぐのことであらう。」というように、世の無常を思う気持ちで、「あはれなり」で表現している。また、「あはれなり…」の歌でも、作者は、他人の葬送から、「わが身の最後も、茶毘の煙、ついには春の野辺にたなびく浅緑色の霞となつてしまふのかと」(新大系)想像して、そのように世の無常を思う気持ちを、やはり「あはれなり」で表現している。

・あれわたる秋の庭こそ哀なれまして消えなん露の夕ぐれ

(新古今集・雑上・一五六一・皇太后宮大夫俊成・「千五百番歌合に」)

ここでは、秋の庭の荒れた様子から、自分が世を去る時の庭の様子を想像して、その無常への感慨を「あはれなり」によって表している。

・あはれなり昔の人をおもふには昨日の野辺に御ゆきせましや
(新古今集・雑上・一四三八・一条左大臣・「円融院、くらあさり給ひてのち、ふな岡に子日したまひけるに、まありて、朝にたてまつりける」)

この歌を新編日本古典文学全集『新古今和歌集』は、「千代を祝うはずの子の日に、昔、行を共にした人をしのお御幸になったことかと、退位した円融院の心情に同情した贈歌というように解される。」と説明している。世の変化の大きさに無常を感じて「あはれなり」と表現したものと推測される。

以上のように、雑その他の歌十八首のうち、悲しさ・寂しさを「あはれなり」で表現したものが七首、無常の思いを「あはれなり」で表現したものが五首見つけられた。後者は前者に含まれる

ものとも言え、八代集の雑その他の歌の「あはれなり」が、主として悲しく寂しい思いを表すために用いられていることがわかる。

以下、残り六首の歌で、「あはれなり」がどういう意味で用いられているのか、その用例を確認する。

・ つねよりもけふのかすみぞあはれなるたきぎつきにしけぶりとおもへば

(後拾遺集・雑六(釈教)・一一八〇・前律師慶暹・「山階寺の涅槃会にまうでてよみ侍ける」)

・ 暁のゆふつけどりぞあはれなるながきねぶりをおもふ枕に

(新古今集・雑下・一八一〇・式子内親王・「百首歌に」)
この二首では、「かすみ」「暁のゆふつけどり」という、それ自体は日常的なものに対して、「たきぎつきにしけぶりとおもい」、「ながきねぶりをおもふ」ことによって、「(2)しみじみと感慨深いさま。感無量のさま。」(日本国語大辞典 第二版)を感じ、その特別な感慨を「あはれなり」と表現している。

・ なほざりのそらだのめせであはれにもまつにかならずいづる月かな

(後拾遺集・雑一・八六二・小弁・「こむといひつつござりける人のもとにつきのあかかりければつかはしける」)

この歌は、「そらだのめ」する男と、「まつにかならずいづる月」を対比し、後者について、「(8)殊勝なさま。感心なさま。」(日本国語大辞典 第二版)を感じ取って「あはれに」と表現している。

・ ひとりのみあはれなるかと我ならぬ人にこよひの月をみせば

や (千載集・雑上・九八六・和泉式部・「題不知」)

・ 夏かりのあしのかりねもあはれなりたまえの月の明がたの空

(新古今集・羈旅・九三二・皇太后宮大夫俊成・「守覚法親王家に、五十首歌よませ侍りける旅歌」)

・ をりにあへばこれもさすがにあはれなり小田のかはづの夕暮の声

(新古今集・雑上・一四七七・前大納言忠良・「百首歌たてまつりし時」)

この三首に用いられた「あはれなり」は、「しみじみとした風情のあるさま。情趣の深いさま。嘆賞すべきさま。」(日本国語大辞典 第二版)に当てはまるものと思われる。ただし、そこで嘆賞されているのは、一人で眺めた秋の月、夏刈りの蘆を敷いての旅寝、夕暮れに田で鳴く蛙の声であり、寂しさを伴うものであることには注意したい。

3 恋の歌の「あはれなり」

八代集の恋部において、「あはれなり」は八首の歌に用いられている。

その中で、「あはれなり」が、恋に直接関係のある思いを表現しているものは、次の二首である。

・ ながらへてあらぬまでも事のはふかきはいかにあはれなりけり

(後撰集・恋一・六〇〇・よみ人しらず・「をとこにつかはしける」)

・過ぎてゆく月をもなにかうらむべきまつわが身こそあはれな
りけれ

(後拾遺集・恋二・六八九・読人不知・「大式高遠ものい
ひはべりけるをんなのいへのかたはらにまたしのびても
のいふをんなのいへはべりけり、かどのまへよりしのび
てわたりはべりけるをいかでかききけんをむなのもとよ
りつかはしける」)

「ながらへて…」詠では、愛情深い言葉をかけられた時のしみ
じみとうれしい気持ちをも、「過ぎてゆく…」詠では、別の女に通
う男を待つみじめな思いを、それぞれ表現している。

これに対し、他の六首では、恋の苦しみなどに限定されない、
もつと一般的な心情を「あはれなり」によつて表現している。

・われゆゑの涙とこれをよそにみばあはれなるべき袖のうへか
な

(千載集・恋二・七五七・藤原隆信朝臣・「題しらず」)
・あはれにもたれかはつゆもおもはましきえのこるべきわが身
ならねば

(新古今集・恋三・一二二六・久我内大臣・「返し」)

右の二首では、「あはれなり」はともに、「(4) 気の毒なさま。
同情すべきさま。哀憐。また、思いやりのあるさま。思いやりの
心。」(日本国語大辞典 第二版)に当たる気持ちを表現してい
る。「われゆゑの…」詠では、自分につれなくされて男が流す涙
を見て、かわいそうだと思う気持ちを、「あはれにも…」詠では、
相手が思つて死んだことを知つて、それを哀れだと思つて気持ちを、
それぞれ表している。

・人はこで風のけしきもふけぬるにあはれにかりのおとづれて
ゆく

(新古今集・恋三・一二〇〇・西行法師・「題しらず」)

右の歌の、「かりのおとづれて」は、新大系が、「人はこで」の
対。音を立てる意と訪れる意とを兼ねる。」と注に記すように、
男が訪ねて来ないということ、訪れる雁を対比させて、その雁
の「いじらしく、心にしみるさま。」(新大系)を、「あはれに」
と表現している。ここでの「あはれなり」は、先に見た、

・なほざりのそらだのめせであはれにもまつにかならずいづる
月かな (後拾遺集・雜一・八六二・小弁)

という雑歌と同様に、「(8) 殊勝なさま。感心なさま。」(日本国
語大辞典 第二版)という語義に当てはまる。

・としふれどあはれにたえぬ涙かな恋しき人のかからましかば
(千載集・恋五・九三九・左京大夫頭輔・「百首歌めし
ける時、恋歌とてよませたまうける」)

この歌の「あはれに」は、「しみじみと悲しく」(新大系)、「逢
えない悲しさに」(『久安百首全釈』)と、解釈されている。けれ
ども、これは、長い年月が経つたにもかかわらず、涙が「たえぬ」
ことに、「(8) 殊勝なさま。感心なさま。」(日本国語大辞典 第
二版)を感じてその気持ちを表現しているものと思われる。

・物おもへどもかからぬ人もあるものをあはれなりける身のち
ざりかな

(千載集・恋五・九二八・円位法師・「題しらず」)

・あはれなりうたたねにのみみし夢のながきおもひにむすほ
れなん

〔新古今集・恋五・一三八九・皇太后宮大夫俊成・「千五百番歌合」に〕

この二首では、我が身の「ちぎり」や不合理な苦しみに対する嘆きが、「あはれなり」によって表現されている。「物おもへども」詠では、「苦しい恋の体験にわが身の因果を嘆く」（新大系）

気持ちを表現し、「あはれなり」詠では、女との逢瀬が短い夢のようなものだったのに、そのことでこれからとても長く苦しむのだろうと、その不合理さを想像して嘆いている。ここの「あはれなり」は、「(5)もの悲しいさま。さびしいさま。また、悲しい気持。悲哀。」(日本国語大辞典 第二版)に当てはまる。

以上のように、恋歌において、「あはれなり」は恋に直接結びつく心情を表現した例は少なく、多くの歌でもっと一般的な心情を表現している。後者の例では、雑歌その他の歌における「あはれなり」の使い方との共通点が多く見られる。

4 四季の歌の「あはれなり」

八代集の四季の部において、「あはれなり」を含む歌は、十一首。これに、先にも述べた、四季歌の要素の強い、拾遺集・雑春の一首と、同じく拾遺集の物名歌を一首加えて、概観することにする。

「あはれなり」を用いた四季の歌には、純粹に自然についての感慨を表現した用例は少なく、人事の要素を含んだ歌や、対象を擬人化した歌が多く見られる。

・ なでしこはいづれともなくにはへどもおくれてさくはあはれ

なりけり

〔後撰集・夏・二〇三・太政大臣・「師尹朝臣のまだわらはにて侍りける」とこ夏の花ををりてもちて侍りければ、この花につけて内侍のかみの方におくり侍りける〕

たとえば、右の歌では、年少のわが子を遅れて咲くなでしこにぞらえて、その子を愛する気持ちを「あはれなりけり」と詠んでいる。この「あはれなり」は、「(1)心に愛着を感じるさま。いとしく思うさま。また、親愛の気持」(日本国語大辞典 第二版)に当てはまる。

・ しらぎくのうつろひゆくぞあはれなるかくしつっこそ人もかれしか

〔後拾遺集・秋下・三五五・良暹法師・「いもうとにはべりける人のもとにをとここずなりにければ九月ばかりにきくのうつろひて侍けるをみてよめる〕

この歌では、色が移ろった白菊の花を見て、それを来なくなつた男に重ね合わせて、その悲しみを「あはれなる」と表現している。

・ ふけにけるわがよの秋ぞあはれなるかたぶく月は又もいでな

ん (千載集・秋上・二九七・藤原清輔朝臣・「題しらず」
・ いそがれぬ年のくれこそあはれなれ昔はよそにきさし春かは
〔新古今集・冬・七〇一・入道左大臣・「百首歌たてまつりし時」〕

・ おいのなみこえける身こそあはれなれことしも今は末の松山
〔新古今集・冬・七〇五・寂蓮法師・「土御門内大臣家にて、海辺歳暮といへる心をよめる」〕

この三首では、自分自身の老いを、「ふげにけるわがよの秋」「いそがれぬ年のくれ」「おいのなみこえける身」と表現し、それについての感慨を、「あはれなり」を用いて表現している。

以上の四首に使われた「あはれなり」は、「(5)もの悲しいさま。さびしいさま。また、悲しい気持。悲哀。」(日本国語大辞典 第二版)に当てはまる。

人事の歌(述懐歌・恋歌)の要素を含む、以上のような歌以外にも、四季の景物などを擬人化して、それに対する感慨を「あはれなり」と表現した歌も目立つ。

・おとせでおもひにもゆるほたるこそなくむしよりもあはれなりけれ

(後拾遺集・夏・二二六・源重之・「ほたるをよみはべりける」)

・あはれにもみさをにもゆる蛸かなこゑたてつべきこの世とおもふに
(千載集・夏・二〇二・源俊頼朝臣・「題しらず」)
・あはれにもたえずおとするしぐれかなとふべき人とはぬすみかに

(後拾遺集・冬・三八〇・藤原兼房朝臣・「かつらの山庄にてしぐれのいたうふり侍ればよめる」)

右の三首では、蛸を、「おとせでおもひにもゆるほたる」「みさをにもゆる蛸」と擬人化し、時雨を、「とふべき人とはぬ」こととの対比で、「たえずおとするしぐれ」と表現して、それぞれ擬人化された景物への同情や共感を詠んでいる。

・年ごとにさきはかはれど梅の花あはれなるかはうせずぞありける

(拾遺集・雑春・一〇一三・よみ人しらず・「題しらず」)
右の歌では、毎年よい香りを漂わせる「梅の花」について、先の「あはれにもたえず…」の歌の「たえずおとするしぐれ」と同様に、その「(8)殊勝なさま。感心なさま」(日本国語大辞典 第二版)を賞美している。

・あしひきの山のこのはおちくちばいろのをしきぞあはれなりける

(拾遺集・物名・四一七・輔相・「くちばいろのをしき」)
・あはれにもくれゆくとしのひかずかなかへらむことは夜のまとおもふに

(千載集・冬・四七一・相模・「としのくれの心をよめる」)
この二首では、朽ちていく落ち葉や、暮れていく年を取り上げ、それとの別れを悲しむ思いを、それぞれ「あはれなり」で表現している。

これまで見てきたように、「あはれなり」を用いた四季歌は、人事の要素を含んだり、対象を擬人化した歌が多く見られる。その中で、四季の景物そのものへの感慨を「あはれなり」と表現したのは、次の二首だけである。

・あきふくはいかなるいろのかぜなれば身にしむばかりあはれなるらん (詞花集・秋・一〇九・和泉式部・「題知らず」)
・このごろのをしのうきねぞあはれなるうはげの霜よ下のこほりよ

(千載集・冬・四三二・崇徳院御製・「百首歌めしける時、よませ給うける」)

この二首の場合、「秋風」は身にしみるほど悲しいものとして

詠まれ、冬の「鴛の浮き寝」はとても寒くて気の毒なものとして、詠まれている。

このように、四季の景物でも「あはれなり」と表現されるものはあるが、形容動詞「あはれなり」が表す感情として辞書に示された、「心の底からのしみじみとした感動や感情」「親愛、情趣、感激、哀憐、悲哀などの詠嘆的感情」（日本国語大辞典 第二版）は、やはり四季歌の景物そのものよりも、人事の歌あるいは人事の要素を含む四季の歌に詠まれる事柄や状況のほうに、よりなじみやすいということが確認できる。

5 係助詞「は」「ぞ」「こそ」との共起

次に、八代集の和歌における「あはれなり」の用い方に関して、助詞との共起で目立つ傾向に二つ触れておきたい。

まず取り上げるのは、助詞「は」「ぞ」「こそ」とともに用いられた例のうち、「は（ぞ・こそ）あはれなり（あはれなる・あはれなれ）」という形をとっているものである。こうした形の例は、「はあはれなり」が三首、「ぞあはれなる」が七首、「こそあはれなれ」が七首の、合計十七首が見出される。

・ なでしこはいづれともなくにはへどもおくれてさくはあはれなりけり
（後撰集・夏・二〇三・太政大臣）

・ ながらへてあらぬまでも事のはふかきはいかにあはれなりけり
（後撰集・恋一・六〇〇・よみ人しらず）

・ わけわびていとひし庭のよもぎふもかれぬとおもふはあはれなりけり
（千載集・雑中・一一四五・法眼兼覺）

右の三例は、「はあはれなり」という形を用いた用例である。係助詞「は」の語義は、「ある事柄を特に取り立てて教示する意を表す。そこに他と区別し、他の事柄を排斥する気持ちがある。」と説明されている（古語大辞典）。

この三首の歌でも、それぞれ、遅れて咲く撫子の花（「遅く生まれたわが子」、愛情の深い言葉、枯れた庭の蓬が、それぞれ「は」を伴って、特に取り立てて示され、それに対する感情が「あはれなり」で表現されている。

こうした表現については、「いづれともなくにはへども」という逆接、「いかに」という強調の副詞、繁茂して「わけわびていとひし」状態だったこととの対比などを伴って、対象を取り立てる機能がさらに強化されていることにも注目される。

・ あしひきの山のこのはおちくちばいろのをしきぞあはれなりける
（拾遺集・物名・四一七・輔相）

・ しらぎくのうつろひゆくぞあはれなるかくしつこそ人もかれしか
（後拾遺集・秋下・三五五・良暹法師）

・ つねよりもけふのかすみぞあはれなるたぎつきにしけぶりとおもへば
（後拾遺集・雑六（釈教）・一一八〇・前律師慶暹）

・ さだめなきよをうきくもぞあはれなるたのみし君がけぶりとおもへば
（金葉集・雑下・六二二・藤原資信）

・ ふけにけるわがよの秋ぞあはれなるかたぶく月は又もいでなり
（千載集・秋上・二九七・藤原清輔朝臣）

・ このごろのをしうきねぞあはれなるうはげの霜よ下のこほりよ
（千載集・冬・四三一・崇徳院御製）

・暁のゆふつけどりぞあはれなるながきねぶりをおもふ枕に

(新古今集・雑下・一八一〇・式子内親王)

右の七首は、「ぞあはれなる」の用例である。係助詞「ぞ」の語義は、「ぞ」の付いた語や句を特に取り立てて強調する意を表す。」(古語大辞典)というように、「は」とほぼ同じように説明されている。

この七首の歌でも、特定の対象、状態などを「ぞ」で取り立て、それに対する感慨を「あはれなり」で表現している。ここでも、人の訪れの途絶えとの重ね合わせ、「つねよりも」という比較「かたぶく月」との対比などが行われ、また、取り立てて「あはれなり」と感じられる根拠として、「たきぎつきにしけぶりとおもへば」「たのみし君がけぶりとおもへば」「うはげの霜よ下のこほりよ」「ながきねぶりをおもふ枕に」といった表現が添えられている。

・おとせでおもひにもゆるほたるこそなくむしよりもあはれなりけれ

(後拾遺集・夏・二二六・源重之)

・すきてゆく月をもなにかうらむべきまつわが身こそあはれなりけれ

(後拾遺集・恋二・六八九・読人不知)

・いにしへにふりゆく身こそあはれなれむかしながらのはしをみるにも

(後拾遺集・雑四・一〇七四・伊勢大輔)

・人をとふかねのこそあはれなれいつかわがみにならむとすらん

(詞花集・雑下・四〇六・よみ人しらず)

・いそがれぬ年のくれこそあはれなれ昔はよそにききし春かはいそがれぬ年のくれこそあはれなれことしも今は末の松山

(新古今集・冬・七〇一・入道左大臣)

(新古今集・冬・七〇五・寂蓮法師)

・あれわたる秋の庭こそ哀なれまして消えなん露の夕ぐれ

(新古今集・雑上・一五六一・皇太后宮大夫俊成)

この七首は、「こそあはれなれ」の用例である。「こそ」は、「その受ける語や句を取り立てて強調する。」(古語大辞典)と説明されている。

ここでの「こそ」の使い方も、その取り立てて強調する点において、基本的に「は」「ぞ」と同様である。また、「なくむしよりも」という比較、「むかしながらのはし」「昔」との対比などを伴っている点でも、「は」「ぞ」と同様の傾向が見られる。以上のように、係助詞との共起が多くみられるのは、和歌に「あはれなり」を用いる際に、ある事柄や状態を取り立てて、それへの特別な感慨を詠もうとする歌人の意図があったことを想像させる。また、そういう傾向を肯定的に評価する撰者の見方があったことも想像される。

6 終助詞「かな」との共起

八代集の和歌において「あはれなり」との共起がみられる言葉としては、係助詞とともに、終助詞「かな」も注目すべきである。「あはれなり」と「かな」が共に用いられた和歌は、次の九首である。

・あはれにもたえずおとするしぐれかなとふべき人もとはぬすみかに

(後拾遺集・冬・三八〇・藤原兼房朝臣)

・なほざりのそらだのめせであはれにもまつにかならずいづる

月かな

(後拾遺集・雜一・八六二・小弁)

・すきぎける月日のほどもしられつこのみを見るもあはれなるかな

(金葉集・雜上・五六三・上東門院)

・あはれにもみさをにもゆる蜜かなこゑたてつべきこの世とおもふに

(千載集・夏・二〇二・源俊賴朝臣)

・あはれにもくれゆくとしのひかずかなかへらむことは夜のまとおもふに

(千載集・冬・四七一・相模)

・あはれなる野じまがさきのいほりかな露おく袖に浪もかけけり

(千載集・羈旅・五三一・皇太后宮大夫俊成)

・われゆゑの涙とこれをよそにみばあはれなるべき袖のうへかな

(千載集・恋二・七五七・藤原隆信朝臣)

・物おもへどもかからぬ人もあるものをあはれなりける身のちぎりかな

(千載集・恋五・九二八・円位法師)

・としふれどあはれにたえぬ涙かな恋しき人のかからましかば

(千載集・恋五・九三九・左京大夫頭輔)

終助詞「かな」は、詠嘆の意を表し、「…だなあ。…なあ」の意を表す。(『古語大辞典』)

もともと、「あはれなり」という形容動詞は、「心の底からのしみじみとした感動や感情、また、そういう感情を起こさせる状況を」を表す言葉であるから(『日本国語大辞典 第二版』)、詠嘆を表す「かな」は、「あはれなり」の表す感動や感情をいつそう強めるために用いられていることが推測される。

次に形式的な点では、「あはれにも…かな」という組み合わせが五例を数え、典型的な表現となっていることが目立つ。それとともに、「あはれなり」の連体形、あるいは「あはれなり」+助

動詞「べき」「ける」が名詞を修飾し、その名詞に「かな」が接続する形、すなわち、「あはれなる(あはれなるべき・あはれなりける)…かな」という形も三例ある(これらは、先に概観したような、「…は(ぞ・こそ) あはれなり(あはれなる・あはれなれ)」という単刀直入な表現よりも、より複合的な内容の表現を指した形式なのだろうと思われる)。

次に、歌集については、九首の用例中六例が、千載集に集中していることが注目される。千載集は、「あはれなり」の使用数、使用率とも、一位の歌集であり、「あはれなり」を用いた和歌を比較的高く評価した歌集であるといえる。その千載集に「あはれなり」と「かな」が共起した歌が多いことは、千載集の撰者が、もともと好んだ「あはれなり」の感慨をさらに「かな」で強調した表現を評価したということだと思われる、注目される。

ちなみに、千載集の次の新古今集では、「あはれなり」と「かな」が共起した例は一首も存在しない。「かな」の用例自体は、新古今集にも多数存在するので、新古今集の撰者たちが、「あはれなり」の心情を「かな」で強めた歌を、消極的に評価していたことが窺える。

注

- (1) 山口仲美『平安文学の文体の研究』(明治書院) 第二章「仮名文学と形容詞・形容動詞」
- (2) 漆谷広樹「形容動詞」語幹構成要素の「ゲ」に関する一考察(『専修国文』四二号、一九八八年二月)
- (3) 八代集の和歌の引用は、新編国歌大観による。なお、二度目

の引用を行う際は、詞書の情報を省略する。

(4) 新日本古典文学大系の八代集に言及する際は、それぞれの歌集名を省いた上で、「新大系」という略称を用いる。

(5) この歌は、新編国歌大観では、二句を「あはれにたへぬ」としている。これは、「堪へぬ」の意と判断したものと思われる。けれども、ここでは、「絶えぬ」の意が妥当だろうと考え、「新大系、岩波文庫『千載和歌集』等の本文に従って改めた。

なお、下の句の具体的な内容については、「恋しい人がこのように涙を流すのであったらよいのに。」(新大系) というように解釈されているが、『八代集抄』が「恋しき人のかく絶ぬ中ならましかば嬉しからん物をと也。」と述べるように、「(この涙と同じくあの人の訪れも) 途絶えないうてくれたらよいのに」と解するのが適当だろう。

(6) 「あはれにも…」の歌について、新大系は、「しみじみと心にしみて暮れてゆく年の終りの日数であるよ、年が改まるのはたった一夜のうちと思うと。」と解するが、下の句は、「年が改まるのはたった一夜のうちと思うけれど。」の意だろう。

(しえ) じん 本学大学院博士後期課程